

## 第7章

### 「ベトナム症候群」の払拭？

#### ——対グレナダ軍事作戦（1983年）の経緯と帰結

小椿 整治

#### はじめに

本章は、1983年のグレナダに対する軍事作戦「アージェント・フューリー (Urgent Fury)」に焦点を当て、その実態（計画、準備、作戦推移、問題点）を明らかにするとともに、作戦の実施がアメリカ軍のあり方に与えた影響について考察する。第6章に続いて、1980年代におけるいくつかの実戦経験がアメリカ軍のあり方に重要な変化をもたらし、「ベトナム症候群<sup>1</sup>」を払拭する上で大きな役割を果たしたのではないかというのが、本章の問題意識である。

#### 1. 作戦の背景

##### （1）1980年代初頭のアメリカの対外政策

1980年11月のアメリカ大統領選挙で、ロナルド・レーガン (Ronald Reagan) が現職のジミー・カーター (Jimmy Carter) に勝利を収め、翌年1月に大統領に就任した。第二次戦略兵器制限交渉 (SALT II) の署名に示されるように、カーター政権は当初、ソ連との軍備管理交渉に取り組んだ。また、人権外交を掲げて、従来の反共政策とは一線を画した対外政策を追求した<sup>2</sup>。しかし、1979年12月にソ連がアフガニスタンに侵攻すると、カーター政権は対ソ姿勢を転換し、国防費の大幅な増額に舵を切る。

後任のレーガン大統領はソ連を不誠実で信用ならない国家であると考え、ソ連に対抗するため、カーター政権の末期を大幅に上回る軍備増強を追求した。しかし、ソ連に対する強硬姿勢とは裏腹に、レーガン政権は実際にはソ連との直接的な軍事衝突の回避に努めた。レーガン政権がソ連の衛星国とみなした国家のうち、直接的な軍事力の行使に踏み切ったのはグレナダに対してのみである。一方、ソ連が支援する国家に対しては、反政府勢力を支援することによりソ連の影響力に対する巻き返しを図ろうとした<sup>3</sup>。

<sup>1</sup> 松岡完『ベトナム症候群——超大国を苛む「勝利」への強迫観念』（中央公論新社、2003年）10頁。

<sup>2</sup> 斎藤眞、古矢旬『アメリカ政治外交史』第二版（東京大学出版会、2012年）266–269頁。

<sup>3</sup> ロバート・マクマン『冷戦史』青野利彦監訳（勁草書房、2018年）194–201頁。

## (2) グレナダへのキューバの関与と政変

グレナダでは、1978 年 3 月にモーリス・ビショップ (Maurice Bishop) がエリック・ゲイリー (Eric Gairy) 政権を打倒した。ビショップはマルクス主義に共鳴し、キューバとの関係を親密化させた。アメリカや、より保守的なグレナダ近隣の国家たちは、革命の波及を懸念していた。ビショップはアメリカとの緊張緩和のため 1983 年 5 月にワシントンを訪れ、アメリカの懸念の払拭に努めようとした。これがグレナダでの再度の政変を引き起こし、国防・内務大臣だったハドソン・オースティン (Hudson Austin) 将軍が権力を掌握した。10 月 13 日にビショップは逮捕され、後に処刑された。この政変で、グレナダ在住アメリカ人を保護する必要性が高まった<sup>4</sup>。

ビショップも共産圏へ接近していたためアメリカは注意を払っていたが、オースティンはより過激であり、グレナダにおけるアメリカ人の安全への懸念が高まった。レーガンは回想録の中で、カリブ海諸国からは、グレナダを放置すればキューバやグレナダが他国に侵攻する恐れがあることを理由に、アメリカに介入を要請してきたことを強調している<sup>5</sup>。グレナダで保護対象となるアメリカ人の多くは、首都セントジョージズ (St. George's) にあるセントジョージズ大学医学部の学生であり、その総数は約 800 名にも及んだ<sup>6</sup>。

東カリブ諸国機構 (Organization of Eastern Caribbean States: OECS) は、10 月 21 日にグレナダの無政府状態と暴力を終わらせるための緊急セッションを開いた。OECS のスポークスマンは 22 日に、アメリカへの支援を正式に要請した。同日、グレナダ総督ポール・スクーン (Paul Scoon) は OECS に対して、グレナダを革命政権から解放するよう要請した<sup>7</sup>。

グレナダの保有する軍事力は小規模だった。『ミリタリー・バランス』によると、総兵力は 2,180 人で準軍隊が 8,000 人であった。海空軍は皆無であり、陸軍も主要装備は装甲兵員輸送車が 6 両、85 ミリ砲 6 門、迫撃砲 24 門、対空火砲 18 門に過ぎなかった<sup>8</sup>。実際には正規軍が 463 名、民兵が 257 名であった。グレナダのラジオは作戦開始直前、何千名もの民兵が出動したと放送したが、それはプロパガンダだった<sup>9</sup>。その他に、約 700 人のキュー

<sup>4</sup> 国際戦略研究所編『世界の軍事情勢 全訳「1983～84 年戦略概観」』朝雲新聞社訳 (朝雲新聞、1984 年) 272-273 頁。Cherly Morai-Young ed., *Department of the Army Historical Summary Fiscal Year 1984* (Washington D.C.: Center of Military History United States Army, 1995), p. 237.

<sup>5</sup> ロナルド・レーガン『わがアメリカンドリーム——レーガン回想録』尾崎浩訳 (読売新聞社、1993 年) 588-589 頁。

<sup>6</sup> Brian D. Laslie, *The Air Force Way of War* (Lexington: The University Press of Kentucky, 2015), p. 103; Peter Huchthausen, *America's Splendid Little Wars: A Short History of U.S. Engagements from the Fall of Saigon to Baghdad* (New York: Penguin Group Inc, 2003), p. 67. この医学部の本部はニューヨークにあったが、グレナダに設置された同医学部は、経済的理由からアメリカ本土の医学部に進学できないアメリカ人学生に人気があった。

<sup>7</sup> Ronald H. Cole, *Operation Urgent Fury Grenada* (Washington, D.C.: Joint History Office, Office of the Chairman of the Joint Chiefs of Staff, 1997), pp. 22, 25. 総督からアメリカへの正式な要請は、後述するように 10 月 26 日に書面への署名によってなされた (書面日付は 10 月 24 日)。なお、総督はイギリス国王の代理人という位置づけであり、実際の統治能力は有していない。

<sup>8</sup> 国際戦略研究所編『ミリタリー・バランス 1983-1984』防衛庁調査第 2 課監訳 (朝雲新聞社、1983 年) 266-267 頁。

<sup>9</sup> Edgar F. Raines Jr., *The Rucksack War: U.S. Army Operational Logistics in Grenada, 1983* (Washington, D.C.: Center of Military History United States Army, 2010), pp. 167-168.

ーバ人労働者がいた。彼らは正規な軍ではなかったが、軍事教練に近い訓練を受けており、危険な存在だった<sup>10</sup>。

## 2. 作戦計画と参加部隊

### (1) 計画立案

10月19日、統合参謀本部（Joint Chief of Staff: JCS）からの準備命令を、アメリカ大西洋軍（U.S. Atlantic Command: USLANTCOM）司令官ウェズリー・マクドナルド（Wesley L. McDonald）海軍大將が受け取った。グレナダでの軍事作戦「アージェント・フューリー」には、陸軍の第18空挺軍団および空軍の戦術航空軍団を必要とした。参加部隊は、展開中はマクドナルド大將の指揮下にあるものの、上陸後は現場の上級指揮官の戦術統制下に置かれることになっていた<sup>11</sup>。

10月20日、マクドナルド大將は統合参謀本部議長ジョン・ウィリアム・ベッシー（John William Vessey, Jr.）大將に、作戦の概要を報告した。同日午後、国家安全保障会議（National Security Council: NSC）の最高危機管理委員会である特殊状況グループ（Special Situation Group: SSG）の会議が開かれた<sup>12</sup>。この時点では軍事行動に関する決定は行われておらず、グレナダの問題は外交問題の位置づけであったが、グレナダに所在するアメリカ人に対する危険性がさらに高まった場合に大統領が軍事介入を命じることが、この会議で決定された。そしてSSGは、すでに検討しているJCSによる不測事態計画を支持し、敵軍の無力化およびグレナダの政治的再建など、任務拡大に必要な作業を開始した。これにより、ベイルートへ向かっていた海兵両用即応群1-84（Marine Amphibious Ready Group 1-84: MARG1-84）は進路をグレナダへ向けた<sup>13</sup>。この即応群は、後に第124任務部隊と呼称されることとなる。

アメリカの介入についてOECSから要請があった時点で、SSGに大統領を加えた国家安全保障計画グループ（National Security Planning Group: NSPG）は、10月22日にJCSに対して、グレナダへの軍事作戦計画の策定を正式に命じた<sup>14</sup>。事前に作戦計画を準備していたJCSは、この時点で、①海軍のシールズと1個大隊の海兵隊上陸部隊、あるいは②統合特殊作戦軍（Joint Special Operations Command: JSOC）の構成部隊とレンジャー2個大隊、の2案を考えた。いずれもその総兵力は約1,800名で、さらに後続部隊として2個空挺大隊が増強されることとなっていた<sup>15</sup>。いずれの場合も二つの飛行場を緒戦で迅速に確保し、

<sup>10</sup> 国際戦略研究所編『世界の軍事情勢全訳「1983～84年戦略概観」』272頁。

<sup>11</sup> Cole, *Operation Urgent Fury Grenada*, pp. 16–18.

<sup>12</sup> 議長は副大統領が務め、国務長官、国防長官、中央情報局長官、大統領顧問、大統領首席補佐官、大統領副補佐官、国家安全保障担当大統領補佐官および統合参謀本部議長がメンバーに含まれた。

<sup>13</sup> Cole, *Operation Urgent Fury Grenada*, pp. 13–14.

<sup>14</sup> *Ibid.*, pp. 22–23.

<sup>15</sup> *Ibid.*, p. 23.

首都セントジョージズ周辺の政府、軍関連の枢要な目標を確保することは共通していた。リスクとしては、ソ連の圧力の可能性や、アメリカ人学生が殺害あるいは人質となった場合、国内外から批判を受けることも考えられた。JCS は、リスクは作戦成功の利益により相殺できると結論づけ、作戦成功には迅速かつ正確な攻撃が必要とした<sup>16</sup>。作戦開始にあたって、国務省は国連やリオ条約（米州相互援助条約）加盟国に対して、作戦実施の理由を通知する必要があった。さらにグレナダはイギリス連邦の加盟国であるため、建前上イギリスからの承認を得る必要もあった<sup>17</sup>。

グレナダが 2,000 名の予備役を動員したという情報があり、前述した兵力で対処は困難と考えた NSPG は 10 月 22 日に、JSOC、レンジャー、海兵隊、空挺部隊を 25 日に投入する実行命令をマクドナルド大将に送付するよう、JCS に指示した。軍事行動を取るという大統領の決定により、マクドナルド大将にはグレナダでの任務のために統合部隊を組織することが認められた。JCS はアメリカ即応軍司令官（U.S. Commander in Chief, Readiness Command: USCINCRAD）および軍事空輸軍団司令官（Commander in Chief, Military Airlift Command: USCINCMAC）に追加の地上部隊と輸送機を提供する指示を出した<sup>18</sup>。

10 月 23 日、マクドナルド大将は JCS に対して、最新の作戦コンセプトを説明した。これは以下の 4 段階に分けられた<sup>19</sup>。

（第 1 段階）

海軍のインディペンデンス戦闘群（Task Group 20.5: TG20.5）および海兵隊の MARG1-84 がグレナダ北方海域に前進、侵攻 6 時間前に JSOC チームおよびレンジャー部隊はアメリカ本土の空陸軍基地から展開する。

（第 2 段階）

夜明け前にヘリコプターおよび海上輸送で特殊作戦部隊を展開、偵察し、首都の重要施設を攻撃するとともに、総督を保護するため公邸に移動する。レンジャーおよび海兵隊は 2 か所の飛行場を占拠する。

（第 3 段階）

アメリカ軍はアメリカ人、グレナダ総督、在住外国人の保護を実施する。

（第 4 段階）

軍事空輸軍団（Military Airlift Command: MAC）が 300 名のジャマイカとバルバドスの部隊をグレナダへ輸送、アメリカ軍、グレナダ総督と協力して暫定政府を樹立する。

マクドナルド大将は、第 2 艦隊司令長官ジョセフ・メットカーフ（Joseph Metcalf III）海軍中將が侵攻部隊を指揮することを提案した。侵攻部隊は第 120 統合任務部隊（Joint Task

---

<sup>16</sup> Ibid., pp. 23–24.

<sup>17</sup> Ibid., p. 25.

<sup>18</sup> Ibid., p. 26.

<sup>19</sup> Ibid., pp. 28–29.

Force 120: JTF120) と呼称され、4 個の任務部隊を指揮あるいは支援を得ることになった。すなわち、①任務部隊 123 (Task Force 123: TF123) は JSOC/レンジャー部隊、②任務部隊 124 (TF124) はメットカーフ中將の旗艦を含む MARG1-84、③任務部隊 126 (TF126) は、空軍の戦闘機および航空警戒管制機によって、グレナダに向かう可能性があるキューバの艦船や航空機を阻止することとなっていた。④任務部隊 121 (TF121) は陸軍第 82 空挺師団の第 2、第 3 旅団および支援部隊により編成された<sup>20</sup>。参加部隊指揮系統は、次頁の図のとおりである<sup>21</sup>。

マクドナルド大將は、主な目標である 2 つの飛行場の奪取を、海兵隊と陸軍レンジャー部隊の混成部隊で実施しようとした。一方で JCS は、参加部隊が組織上混成しないシンプルな作戦実施を助言した。JCS 議長ベッシー大將は、海兵隊と陸軍を南北の地域分離で使用することを提議し、23 日午後に JCS は、提議によって修正された作戦コンセプトを承認した。この段階での問題は、大西洋軍司令官マクドナルド大將と、グレナダの作戦任務部隊指揮官メットカーフ中將の司令部に起因した。両司令部とも、その多くが海軍軍人で構成され、陸・空軍の將校が不足していたため、グレナダの作戦では地上部隊の機動や戦術航空支援の計画・実行に支障が出ることを意味した。これに対処するため 23 日夜、JCS はノーマン・シュワルツコフ (H. Norman Schwarzkopf) 陸軍少將を<sup>22</sup>、メットカーフ中將の顧問に据えた<sup>23</sup>。

メットカーフ中將が JTF120 の指揮を執り始めたのは 23 日だったが、作戦開始まで残された時間はわずか 39 時間であり、十分な幕僚を集める時間はなかった。元来、彼は第 2 艦隊司令長官であり、艦隊の幕僚は 40 名いたが、作戦指揮のため強襲揚陸艦「グアム」へすぐに移動する必要があった。しかしスペースの問題もあり、艦隊の幕僚の内、17 名を急ぎ選り戦場に急行した<sup>24</sup>。海軍士官以外の幕僚は、空軍の連絡將校と陸軍ではシュワルツコフの他に、幕僚 2 名も加わった<sup>25</sup>。

最終計画では、作戦発起後のグレナダ制圧のために、海兵隊は島の北部を、特殊部隊は首都を含む南部を制圧することになった<sup>26</sup>。具体的には海兵隊はパールズ (Pearls) 空港、グレンビル (Grenville) 港の奪取と近辺の敵対勢力の無力化が任務となった。南部では主として陸軍レンジャー部隊 (TF123) が、後続する第 82 空挺師団 (TF121) と共に、ポイ

<sup>20</sup> Ibid., pp. 30, 32. 4 個任務部隊の他、第 1 特殊航空団および海軍の 1 個任務軍が指揮下にあった。

<sup>21</sup> Kukielski, *The U.S. Invasion of Grenada*, p. 91 を主に参考としたが、この参考文献での指揮系統図での説明にもあるように、グレナダの軍事作戦での指揮系統に関しては不透明な部分があり、参考文献によってやや異なる場合がある。たとえば、Raines, *The Rucksack War*, p. 109; Mark Adkin, *Urgent Fury: The Battle for Grenada* (Philadelphia: Arcata Graphics, 1989), p. 364 などにも指揮統制図が収録されているが、全て細部で異なっている。

<sup>22</sup> シュワルツコフは湾岸戦争で多国籍軍の指揮を執った (厳密にはアラブ諸国を除く)。

<sup>23</sup> Cole, *Operation Urgent Fury Grenada*, pp. 31–32.

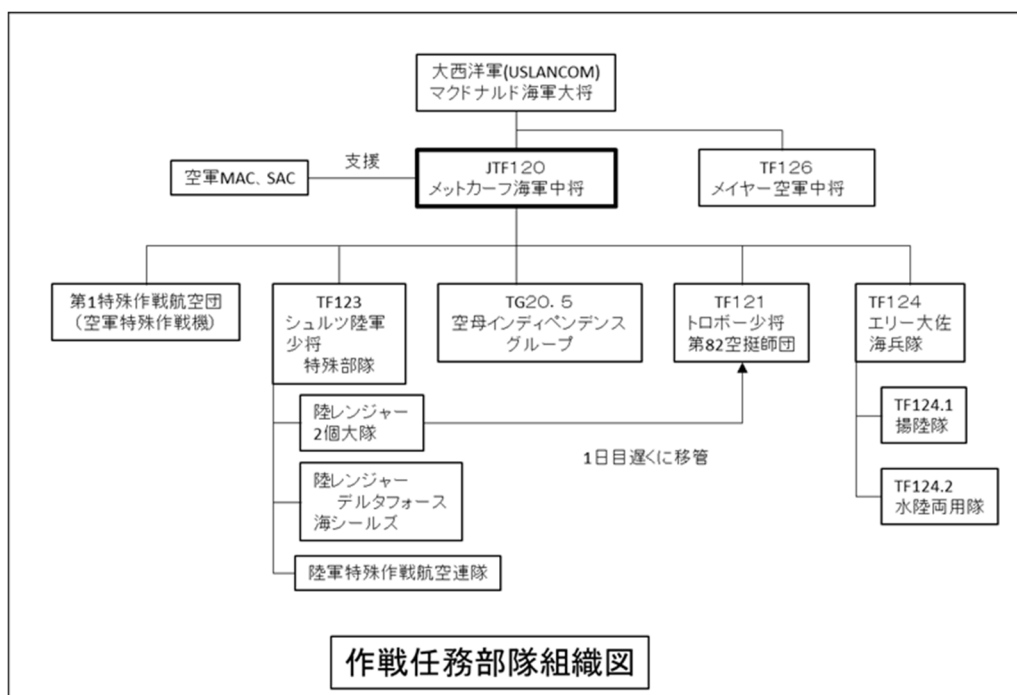
<sup>24</sup> Kukielski, *The U.S. Invasion of Grenada*, p. 26.

<sup>25</sup> Ibid., p. 33.

<sup>26</sup> ナイジェル・カウソーン『世界の特殊部隊作戦史 1970–2011』角敦子訳 (原書房、2012 年) 108 頁。

ントサリナス (Point Salines) 飛行場を含む地域を確保することになった<sup>27</sup>。参加兵力はアメリカ陸軍レンジャーの 2 個大隊、第 82 空挺師団の 1 個旅団、海兵水陸両用隊 (Marine Amphibious Unit: MAU<sup>28</sup>)、空母「インディペンデンス」とその戦闘群、空軍輸送機とガンシップ機 (AC-130)、さらに少数の特殊作戦部隊が参加することとなった<sup>29</sup>。

図 作戦任務部隊組織図



レンジャー 2 個大隊は空軍の C-130 輸送機で輸送されるが、そのうち 5 機は精密なナビゲーション装置を装備する特殊作戦機 MC-130E「コンバット・タロン」であり、ガンシップ AC-130H が 3 機随伴した。さらに指揮統制用として空軍は EC-130ABCCC が参加し、これには TF123 指揮官リチャード・ショルツ (Richard A. Scholtes) 陸軍少将が搭乗し、レンジャー部隊の強襲を空中で指揮統制することとした。また空軍の大型輸送機 C-5A は、特殊部隊やそれが使用するヘリコプターを輸送することとなっていた<sup>30</sup>。レーガンは 10 月 15 日、JCS 議長が必要とした兵力量の倍を投入することを指示した。彼の頭には、カーター前政権期のイラン人質救出作戦の失敗があった。彼は作戦の失敗がヘリコプター機数の少なさにあったと見ていた他、ベトナムでの教訓から、グレナダに対する作戦に関しては徹

<sup>27</sup> Ronald H. Spector, *U.S. Marines in Grenada 1983* (Washington, D.C.: U.S. Government Printing Office, 1987), p. 5.

<sup>28</sup> 野中郁次郎『アメリカ海兵隊——非営利型組織の自己革新』(中央公論新社、1995 年) 151 頁。現在は海兵遠征隊 (Marine expeditionary unit: MEU) と呼称されており、最小規模 (1 個大隊基幹) の空・陸機動部隊である。

<sup>29</sup> Daniel P. Bolger, "Operation Urgent Fury and Its Critics," *Military Review* (July 1986), p. 58.

<sup>30</sup> Kukielski, *The U.S. Invasion of Grenada*, p. 47.

底的な報道管制を実施した<sup>31</sup>。

当初の敵対勢力の見積もりは、人民革命陸軍（People's Revolutionary Army: PRA）の正規兵が約 1,000～1,200 名、民兵が約 2,000～5,000 名、武装キューバ人が約 250 名になると提示された。しかし前述したように、これは実際とは異なっていた。JCS は敵兵力等の見積もりの不確かさを認識しており、この作戦では圧倒的な武力での奇襲が不可欠であると判断した上で、敵を短期間で圧倒することがコンセプトだったが、一方で JCS は火力使用を制限する交戦規定の必要性を強調した。不必要な死傷者等がグレナダ側に出ると、人道的側面で問題が発生し、その後の新政権樹立に不都合が生じるからであった<sup>32</sup>。

## （２）侵攻作戦前の指揮官会議

シュワルツコフ少将は、顧問の話を受けた翌日の 10 月 24 日に USLANTCOM へ赴いた。マクドナルド大将とメットカーフ中将に面会したが、当初 2 人の海軍将官は彼を全く歓迎していないように感じられた。翌日に開始される予定の作戦に関する会議が、2 人の海軍将官とシュワルツコフ少将の他に、TF121 指揮官の陸軍第 82 空挺師団長のエドワード・トロボー（Edward L. Trobaugh）少将、TF123 指揮官の特殊作戦部隊司令官ショルツ少将が同席して実施された。この各軍種の指揮官が参加した初めての会議では、シュワルツコフ少将だけではなく、ショルツ少将とメットカーフ中将との間でも、当初は感情的なすれ違いがあった。その後、侵攻作戦開始まで 19 時間というタイミングで、最後の作戦会議が実施された。

しかしこの時点でも、マクドナルド大将や国務省は、外交的解決によって作戦実施が不要になる可能性が大きいと考えていた。また、作戦が発動されたとしても敵対勢力はアメリカ軍に対し抗戦意思を示すことはない、とマクドナルド大将は言明した。しかし、それに関して根拠は示されず、同席していたシュワルツコフ少将は疑念を感じた。侵攻作戦発起は 25 日の 0500 とされた。事前にシールズがグレナダの枢要地に対する偵察を実施することとされ、会議では作戦発起日の夕刻にはグレナダを手中にすると見込まれた<sup>33</sup>。ポイントサリナスを偵察していたシールズが行方不明となったため、再度の偵察が認められ、特殊作戦部隊とレンジャーによる南部への上陸を 1 時間遅延させ、夜間ではなく夜明けに上陸することとなった。ポイントサリナスの情報が不足していたため、1 日延期も考慮されたが、国務省関係者は関係各国との調整をめぐって難色を示し、マクドナルド大将も敵対勢力は三流とみなしていたため、遅延は 1 時間となった<sup>34</sup>。

一方で 24 日夜、本格的な軍事侵攻を前にして、レーガン大統領はイギリスのマーガレッ

<sup>31</sup> 村田晃嗣『銀幕の大統領ロナルド・レーガン——現代大統領制と映画』（有斐閣、2018 年）395 頁。

<sup>32</sup> Cole, *Operation Urgent Fury Grenada*, pp. 21–22, 32. 実際の敵兵力量について、JCS と陸軍戦史研究センターの書籍では相当に開きがある。

<sup>33</sup> H・シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録——少年時代・ヴェトナム最前線・湾岸戦争』沼澤治治訳（新潮社、1994 年）260–264 頁；Kukielski, *The U.S. Invasion of Grenada*, pp. 30–31.

<sup>34</sup> Cole, *Operation Urgent Fury Grenada*, p. 35.

ト・サッチャー (Margaret Thatcher) 首相から電話を受けた。彼女はレーガン大統領からの書簡で作戦の実施を知らされたばかりだった。グレナダはイギリス連邦の一員であるため、サッチャーは作戦に反対だった。電話の中でレーガンは彼女を納得させることはできなかったが、作戦実施の意思は変わらなかった<sup>35</sup>。

JCS は実行命令で適時にカリブ地域の部隊、カリブ平和維持軍 (Caribbean Peace Force: CPF) を作戦に関与させることが不可欠だとした。CPF はバルバドス防衛軍 (50 名)、ジャマイカ国防軍 (150 名)、OECS 地域安全保障部隊 (100 名の警官隊) から成っていた。彼らはアメリカ軍がグレナダを制圧した直後に、いくつかのアメリカ軍部隊と入れ替わる予定だった。24 日午前、メットカーフ中將は、他の OECS および友好国の参加者と協力して行動することとなった。しかし、マクドナルド大將にとっては急な話であったため、アメリカ以外の軍と調整する時間はなく、十分な連携をとることは困難だった<sup>36</sup>。アメリカとしては、CPF が参加することで、一方的なアメリカ単独の侵攻ではないことを対外的に示す必要があった。メットカーフ中將ら司令部メンバーは 24 日夕刻、強襲揚陸艦「グアム」に到着した。この時点で、本格的な侵攻開始時間は当初の予定より 1 時間遅い 0500 とされた<sup>37</sup>。

### 3. 作戦の推移

#### (1) 特殊部隊の事前偵察

10 月 24 日、侵攻に先立ち、北部と南部において、海岸や飛行場の偵察が特殊部隊によって実施された。北部へ進撃する海兵隊の準備工作のため、海軍特殊部隊シールズのチーム 4 が海岸偵察を実施することとなった<sup>38</sup>。シールズは深夜にパールス空港近辺の海岸の偵察を実施し、当初計画していた海上から海岸への舟艇での着上陸は困難と報告し、ヘリコプターによる兵員輸送に計画が変更された<sup>39</sup>。一方、シールズのチーム 6 は、南部のポイントサリナス飛行場の偵察に送り込まれた。チーム 6 は輸送機から海上へとパラシュート降下し、海軍艦艇にピックアップされ、別のシールズ隊員および空軍の戦闘統制チームと合流した。ボートで上陸後、空軍のチームは飛行場の滑走路の使用可否を確かめることになっていた。可能な場合は障害物を取り除き、誘導無線機を設置して、レンジャー部隊の空輸を待つ手はずになっていた<sup>40</sup>。

チーム 6 の海上への降下予定時間は、夜明け前の暗闇だった。悪天候もあり、半数近く

<sup>35</sup> Kukielski, *The U.S. Invasion of Grenada*, pp. 35–36.

<sup>36</sup> Ibid.

<sup>37</sup> Ibid., pp. 34–35.

<sup>38</sup> カウソン『世界の特殊部隊作戦史 1970–2011』108 頁。

<sup>39</sup> Spector, *U.S. Marines in Grenada 1983*, p. 6.

<sup>40</sup> カウソン『世界の特殊部隊作戦史 1970–2011』108–109 頁 ; Kukielski, *The U.S. Invasion of Grenada*, p. 28.

の人員の損失を招いた。それでもチームは目標飛行場の偵察任務に向かおうとしたが、ポートに問題があったとどり着くことはできず、結局ポイントサリナス飛行場の偵察は実施できなかった<sup>41</sup>。そのため、飛行場の状況偵察は AC-130 によるものとなったが、この偵察の結果、滑走路には車両等の障害物があり、航空機による強行着陸は困難であることが判明した<sup>42</sup>。

## (2) 1 日目 (10 月 25 日) の戦闘

### i. 首都周辺での特殊部隊による攻撃

シールズ、陸軍レンジャー部隊、デルタフォースなどの特殊部隊は、首都セントジョージズ周辺で、重要な 3 つの任務を実施することになっていた。すなわち、①リッチモンドヒル刑務所に収容されている政治犯等の釈放、②ラジオ局の占拠、③総督公邸の確保であった<sup>43</sup>。

シールズの目標だったラジオ局の占拠については、当初は簡単に実現した。しかし、すぐにグレナダ軍から反撃されたため、ラジオ局を維持することができず、空爆で破壊することとなった。さらにシールズを中心としたチームは<sup>44</sup>、総督を救出するために公邸へと向かった。移動には UH-60「ブラックホーク」2 機を使用した。敷地へのヘリコプターの着陸は地形上困難であり、隊員はロープにより降下した。ところが、衛星無線機を含むシールズの装備は降ろされなかった。降下したシールズは、総督公邸の人員の保護には成功したものの、公邸はグレナダ軍に包囲された。衛星無線機がなかったため、短距離無線機を中継してタスクフォース司令部に連絡し、4 時間後に AC-130「スペクター」ガンシップが包囲部隊を制圧攻撃した<sup>45</sup>。

グレナダ軍の装甲兵員輸送車の反撃を受けたシールズは、対戦車兵器を欠いたため、島南部からのレンジャー大隊の救援を待った。しかし、レンジャー大隊はポイントサリナス飛行場の北方でキューバ人部隊と思われる勢力と交戦し、迅速な救援が困難となった。メットカーフ中將は、総督公邸周辺への海軍および海兵隊の航空機による支援を命令した。しかし、地上部隊とヘリコプターの間で正確な目標指示に困難が生じ、海兵隊 AH-1T「シーコブラ」2 機が対空火砲によって撃墜された。

メットカーフは友軍相撃の危険性もあったが、海軍機による目標を絞った攻撃を実施させた。海軍の A-7 攻撃機はシールズの安全を確保するため、敵指揮所と対空火器を午後

<sup>41</sup> カウソン『世界の特殊部隊作戦史 1970-2011』109 頁；Kukielski, *The U.S. Invasion of Grenada*, p. 30.

<sup>42</sup> Kukielski, *The U.S. Invasion of Grenada*, p. 49.

<sup>43</sup> *Ibid.*, pp. 31-32.

<sup>44</sup> このチームには、CIA や国務省の民間人 3 名が含まれた。彼らは、今回の作戦が総督からの要請によるものとする書状をもっていき、日付や総督の署名を求めることになっていた。これによって、今回の軍事行動の正当性を高める狙いがあった。Sanjay Badri-Maharaj, *Urgent Fury Grenada 1983* (Warwick: Helion & Company, 2022), p. 65.

<sup>45</sup> カウソン『世界の特殊部隊作戦史 1970-2011』110-111 頁。

なって攻撃した<sup>46</sup>。セントジョージズへの特殊部隊の攻撃は奇襲を大前提としていたが、攻撃前に他方面で海兵隊やレンジャー部隊が行動を開始していたため、奇襲の条件は失われており、敵の反撃を受けやすい状況だった<sup>47</sup>。

陸軍のデルタフォースは第 1 の目標リッチモンドヒル刑務所に向かい、政治犯等を解放した後、フォート・ルパートを攻撃してオースティン将軍ら高官の身柄を確保する計画だった。しかし事前の情報と異なり、リッチモンドヒルには救出すべき人員は誰もおらず、作戦目的を果たせなかった。グレナダ軍からの対空砲火も激しく、UH-60「ブラックホーク」1機が撃墜され、作戦は中止されたが、フォート・ルパートへの攻撃は成功した<sup>48</sup>。

## ii. 南部への攻撃

10月25日未明、第1、第2レンジャー大隊はMC-130等によりポイントサリナス飛行場の上空に運ばれ、低高度から降下した。対空砲火、小火器による反撃、装甲兵員輸送車も出現したが、空軍のAC-130ガンシップ機によって制圧された<sup>49</sup>。実際には、レンジャーは降下時の対空火砲等による混乱の発生で大損害を出す恐れがあった。それを防いだのは空軍の援護、カストロによる駐留キューバ人への消極的な交戦命令<sup>50</sup>、レンジャー部隊将校の柔軟性といった要素だった<sup>51</sup>。0700過ぎには全ての隊員が降下し、飛行場は昼過ぎに制圧された。飛行場ではキューバ人約250名が捕虜となったが、これらのキューバ人がアメリカ軍の侵攻時点で防衛準備を開始したばかりだったことも幸いした。

レンジャー部隊は、飛行場に隣接するセントジョージズ医療センターのトゥルー・ブルー・キャンパスに向かい、アメリカ人医学生138名を救出した。アメリカ軍は、アメリカ人学生がいるのは同キャンパスのみと思っていたが、セントジョージズ南方のグランド・アンセ（Grand Anse）にある第2キャンパスにもアメリカ人がいることを、作戦当日に関知した。しかし、数マイル離れた第2キャンパスへの経路は敵兵により封鎖されていた。ベッシー大將はマクドナルド大將からの、トロボー少將が指揮する第82空挺師団2個大隊（約1,500名）の派遣要請を承認した。

レンジャー部隊によってポイントサリナス飛行場が使用可能になると、空挺部隊は1000にはポイントサリナス飛行場への空輸を開始し、同日午後には到着した。トロボー少將は空

<sup>46</sup> Cole, *Operation Urgent Fury Grenada*, p. 44. 隣接した病院からフォート・フレデリックに避難した患者に死者が発生した。Badri-Maharaj, *Urgent Fury Grenada 1983*, pp. 66–67; Spector, *U.S. Marines in Grenada 1983*, p. 10.

<sup>47</sup> Badri-Maharaj, *Urgent Fury Grenada 1983*, pp. 61–62.

<sup>48</sup> カウソン『世界の特殊部隊作戦史 1970–2011』111頁；Badri-Maharaj, *Urgent Fury Grenada 1983*, p. 64. なお、Raines, *The Rucksack War*, p. 109によればオースティン将軍は逃走しており、後日アメリカ軍によって拘束された。

<sup>49</sup> カウソン『世界の特殊部隊作戦史 1970–2011』111–112頁。

<sup>50</sup> Kukielski, *The U.S. Invasion of Grenada*, p. 41. アメリカ軍にとって幸運なことに、キューバのフィデル・カストロ（Fidel Castro）首相は「アーエージェント・フューリー」作戦が開始される直前、グレナダ在留のキューバ人に対して、アメリカ側が侵攻した場合でも、直接自分たちが攻撃された場合の自衛戦闘のみ認めるという書簡を出していた。そのため、抗戦の激しさが抑えられた。

<sup>51</sup> *Ibid.*, pp. 44–45.

輸終了後、空挺 2 個大隊と先着のレンジャー 2 個大隊、JSOC チームと統合して任務部隊 121 (TF121) を編成した。また、バルバドスのラドヤード・リウス (Rudyard Lewis) 准将 が指揮する CPF も、1045 にポイントサリナス飛行場に到着した<sup>52</sup>。

### iii. 北部への攻撃

北部では、海兵隊がヘリコプターによってパールス空港の南方に着陸した。当初は空港への直接着陸を考えていたが、空港近辺に対空火器があることが判明したため断念した。全機に暗視スコープが装備されていたが、パイロットが全員習熟しているわけではなかった。対空火砲による反撃があったが、海兵隊の AH-1T「シーコブラ」の支援で制圧した。海兵隊は空港へ前進し、散発的な射撃はあったが、0730 までに空港を制圧した。この時、期待していた空軍の AC-130 が掩護できなかつたのは問題だったが、敵はほとんどが逃走した。パールス近辺の港町グレンビル (Grenville) へのヘリコプターによる急襲は、特に抵抗を受けなかった。アメリカ軍は、グレンビルの市民から解放者として歓迎された。海兵隊は 2 時間以内に、飛行場および付近の目標を確保した<sup>53</sup>。

前述したように、作戦初日のアメリカ軍は南部で比較的強力な敵の抵抗にあい、グランド・アンセには救出が必要なアメリカ人学生が取り残されていた。ポイントサリナスの陸軍指揮官は電話で学生と連絡を取り、翌日の避難計画を立てた。一方、北部の海兵隊はほとんど抵抗を受けなかった。シュワルツコフ少将は、島の北部洋上で待機している海兵隊を南部で抵抗する敵対勢力の後方、セントジョージズの北方グランド・マル湾に上陸させることを勧告し、メットカーフ中將も同意した。1900 にはグランド・マル湾へ 250 名の海兵隊と 5 両の戦車、12 両の水陸両用車両が上陸し、敵に包囲されている総督公邸に進撃を開始した。海兵隊の別中隊も同時期にヘリコプターによって空輸され、セントジョージズ方面の作戦に参加した<sup>54</sup>。

ワシントンでは、レーガン大統領が議会および報道機関に対して、グレナダの作戦について説明していた。レーガンは、アメリカ国民の保護と退避を促進するため、アメリカ軍は OECS 安全保障軍に加わったと述べた。しかし、イギリスやカナダはアメリカの行動に納得していなかった<sup>55</sup>。

作戦 1 日目、アメリカ軍はヘリコプター 3 機を喪失したにもかかわらず、総督および学生の救出、ラジオ局の奪取等、当初予定された任務は達成されなかった<sup>56</sup>。メットカーフ中將は、この時点で報道規制をかけていた。依然としてグランド・アンセのアメリカ人学生

<sup>52</sup> カウソン『世界の特殊部隊作戦史 1970–2011』111–112 頁；Cole, *Operation Urgent Fury Grenada*, pp. 41–43; Spector, *U.S. Marines in Grenada 1983*, p. 17; Raines, *The Rucksack War*, pp. 259–262.

<sup>53</sup> Cole, *Operation Urgent Fury Grenada*, p. 41; Kukielski, *The U.S. Invasion of Grenada*, pp. 39–43; Spector, *U.S. Marines in Grenada 1983*, pp. 7–9; Badri-Maharaj, *Urgent Fury Grenada 1983*, pp. 55, 63–64.

<sup>54</sup> Cole, *Operation Urgent Fury Grenada*, p. 45; Spector, *U.S. Marines in Grenada 1983*, pp. 10–12, 15–18.

<sup>55</sup> Cole, *Operation Urgent Fury Grenada*, p. 45.

<sup>56</sup> *Ibid.*, p. 45, 50.

<sup>56</sup> Badri-Maharaj, *Urgent Fury Grenada 1983*, p. 89. 既述したように、本来これらは 1 日目で達成できると考えられていた。

を救出できていないこと、キューバ人の予想外の抵抗があったこと、報道記者をグレナダ入りさせる空輸能力の余裕がなかったことがその理由だった<sup>57</sup>。

### (3) 2 日目 (10 月 26 日) の戦闘

作戦 2 日目、グランド・マル湾上陸の海兵隊は警戒しつつ前進したが、多くの敵が大量の武器を遺棄したまま逃走しており、0712 までに総督公邸に到達した。1000 頃、海兵隊はスクーン総督と立てこもっていたシールズおよび民間人を救出し、ヘリコプターで強襲揚陸艦「グアム」へ輸送した。海兵隊はグレナダ軍の本拠地であるセントジョージズ郊外のフォート・フレデリックへ向かい、10 時間後に占拠した。総督は「グアム」からポイントサリナス飛行場を経由して、首都セントジョージズに移動した。彼はイギリスと連絡をとり、暫定政権の中核になるよう指示を受けた<sup>58</sup>。

まだ救出されていないアメリカ人学生の捜索のため、グレナダ南端に位置するトロボー少将指揮の TF121 は、トゥルー・ブルーからキューバ側の本拠地フレケンテ (Frequente) での激しい抵抗を排除して北上し、グランド・アンセに到達した。同地での敵の防御が固いことが判明し、トロボー少将はメットカーフ中將へ支援を上申した<sup>59</sup>。

シュワルツコフ少将は当初メットカーフ中將の顧問という位置づけだったが、地上作戦を調整する上で、その曖昧さが問題だったため、10 月 26 日に統合任務部隊の副指揮官に指名された。彼は、学生が所在するグランド・アンセを海兵隊の作戦区域に組み入れた。同地の救出任務では海兵隊の中佐がヘリコプター作戦の指揮を執り、支援の海軍機 A-7 と空軍の AC-130 ガンシップを統制した。また、この任務は海軍の艦砲射撃、陸軍火砲および海兵隊 AH-1T「シーコブラ」の支援も受けることになっていた。1600 に 6 機の海兵隊「シーナイト」ヘリコプターが、陸軍レンジャー部隊をグランド・アンセに輸送した。レンジャー部隊は 30 分ほど交戦したが、学生たちに電話で連絡し、被害の発生を防いだ。救出のために海兵隊の「シースタリオン」ヘリコプター 4 機が到着し、224 名の医学生を退避させた。レンジャー部隊をピックアップするためヘリコプターが再度着陸したが、「シーナイト」ヘリコプター 1 機が木と接触し、人員に被害はなかったものの喪失した<sup>60</sup>。

マクドナルド大將は JCS に対して、疲労しているレンジャー部隊および海兵隊の交替として、第 82 空挺師団から新たに 2 個大隊の派遣を要望した。この増援 2 個大隊は 2117 にポイントサリナス飛行場に到着し、グレナダに投入された空挺師団に所属する兵員数は約 2,000 名から約 5,000 名へと増大した<sup>61</sup>。26 日の遅くまでに、アメリカ軍に押収された文書によって、グレナダ、キューバ、ソ連の軍事協力計画が明らかになった。この事実は、グレナダ侵攻作戦に疑念を持つ国際社会を納得させるためにも、公開が有効であると思われ

<sup>57</sup> Cole, *Operation Urgent Fury Grenada*, p. 46.

<sup>58</sup> Ibid., p. 47; Spector, *U.S. Marines in Grenada 1983*, pp. 16–17.

<sup>59</sup> Cole, *Operation Urgent Fury Grenada*, p. 47.

<sup>60</sup> Ibid., p. 48; Spector, *U.S. Marines in Grenada 1983*, pp. 17–18.

<sup>61</sup> Cole, *Operation Urgent Fury Grenada*, p. 49.

るものだった<sup>62</sup>。

#### （４）戦闘の終了

翌 10 月 27 日も戦闘は継続した。海兵隊は首都で散発的抵抗を排除し、陸軍空挺部隊は南部でのキューバ人の抵抗を排除しつつ前進したが、航空支援が不十分であったため、その速度は緩やかだった。作戦に必要なガンシップやヘリコプターが近くのポイントサリナス飛行場に展開しておらず、海軍の航空機や砲撃による支援要請が求められた。しかし、空挺部隊は航空・火力支援を海軍部隊に対して迅速に要請する手段をもたなかったため、進撃速度に影響が発生したのであった。JCS からメットカーフ中將に対しては、敵兵舎のあるカリビーニ (Calivigny) を日没までに奪取する要望がなされた。地上戦担当のシュワルツコフ少將は、作戦の進捗に鑑みて空挺部隊による翌 28 日の奪取を考えていたが、それでは間に合わないため、トロボー少將はレンジャー部隊とヘリコプター使用による攻略を計画した。1750 に海軍艦艇と A-7 による援護攻撃が開始され、陸軍の UH-60 により運ばれたレンジャー部隊が攻撃を実施し、2100 までに兵舎を占拠した<sup>63</sup>。

この日の夕方までに、海兵隊と陸軍の作戦地境が 2 回ほど南に動いた。海兵隊は境界線に位置するロスポイントホテルを確保したが、陸軍空挺部隊に地境変更の情報が十分に伝わらなかった。そのため、夜間に陸軍部隊がホテルに到着したとき、彼らは海兵隊がいることに驚いた<sup>64</sup>。

こうして、27 日をもって主な軍事行動は終了し、28 日以降は狙撃兵による抵抗に対する掃討作戦が中心となった<sup>65</sup>。海兵隊は作戦区域を第 82 空挺師団に引き渡す準備を開始し、11 月 2 日には海兵隊がグレナダから引き揚げ、陸軍部隊がそれを引き継いだ<sup>66</sup>。CPF は都市部の治安維持を担い、空挺部隊は山間部の掃討を実施した<sup>67</sup>。そして、11 月 2 日には戦闘終結が宣言された<sup>68</sup>。この作戦で、アメリカ軍の参加兵力は約 8,000 名（他に CPF が 353 名参加）で 19 名が死亡、116 名が負傷した。グレナダ軍は 45 名が死亡、358 名が負傷、キューバ軍は 25 名が死亡、59 名が負傷し、638 名が捕虜となった<sup>69</sup>。

<sup>62</sup> Ibid., p. 51.

<sup>63</sup> Ibid., p. 52-53.

<sup>64</sup> Spector, *U.S. Marines in Grenada 1983*, pp. 21-22.

<sup>65</sup> Cole, *Operation Urgent Fury Grenada*, pp. 55, 57.

<sup>66</sup> Spector, *U.S. Marines in Grenada 1983*, pp. 22, 25.

<sup>67</sup> Cole, *Operation Urgent Fury Grenada*, p. 59.

<sup>68</sup> カウソーン『世界の特殊部隊作戦史 1970-2011』113 頁。

<sup>69</sup> 同上；Cole, *Operation Urgent Fury Grenada*, p. 62.

## 4. 軍事作戦における問題点

### (1) 統合任務部隊 (JTF120) 司令部の問題

JCS の見解では、JTF120 司令部には陸上および航空作戦の専門知識が不足していた。その結果、作戦当初の数日間はレンジャー部隊や海兵隊による地上作戦に整合性がなく、統一された航空支援もなかった<sup>70</sup>。JTF120 司令部は、立ち上げの経緯から当初の幕僚の全員が海軍士官であった。しかし、グレナダの作戦は海上作戦ではなく地上戦が主たる部分であり、すぐに空軍の連絡官と数名の陸軍幕僚が JTF120 司令部へと組み入れられたが、それでも統合作戦に必要な幕僚のメンバー構成は不十分だった<sup>71</sup>。その状況を JTF120 司令部があまり問題視しなかったのは、敵への過小評価があったためである。

司令部の要員不足は、兵站、民軍関係、広報業務にも影響を与えた。不十分な兵站計画は作戦開始後のグレナダへの部隊、補給物品、燃料輸送の到着に遅延を生じさせ、兵士たちは必要な物資を現地調達せざるを得なかった。また、衛生兵の不足や負傷者の後送手順の混乱で、負傷兵の治療も遅延した。負傷兵を空輸する陸軍ヘリコプターのパイロットが海軍の艦艇に着陸するには、事前の教育や訓練なしでは困難だった。さらに、民事や公衆衛生要員の不足は、それらを戦闘要員が肩代わりすることを意味した<sup>72</sup>。

USLANTCOM が「アーjent・フューリー」作戦を担当した理由は、グレナダの地理的位置がその担当区域にかかっていたからに過ぎなかった。USLANTCOM は多軍種を含んでいるものの、実質は海軍部隊であった。ところがグレナダでは、海軍は脇役にすぎなかった。地上部隊に関する単一司令部は、陸海軍間で合意が得られなかったため作られなかった。エドワード・ルトワック (Edward N. Luttwak) は、この作戦が陸軍将校により立案されたならば、レンジャー部隊と空挺部隊の迅速な空輸による、効果的な奇襲作戦が実施されていたであろうと述べている。特に軽装備のシールズは、特殊部隊であるというだけで他の重装備の特殊部隊と同様の強襲作戦を命じられており、これをルトワックは海軍提督の陸上戦に対する理解度の低さの証左としている<sup>73</sup>。

### (2) 情報の不足

「アーjent・フューリー」作戦では、情報不足も顕著だった。リッチモンドヒルでの救出作戦が空振りに終わったこと、事前の敵兵力の見積もりが不正確だったことが、その証拠である。グレナダが 1979 年の政変でソ連やキューバに接近して以降、アメリカはグレナダに対する情報収集の機会をほとんど持てなかった。そのため、マクドナルド大将の幕僚たちは、グレナダに関する戦術情報を入手できなかった。古い情報からグレナダ軍の

<sup>70</sup> Cole, *Operation Urgent Fury Grenada*, p. 66; Kukielski, *The U.S. Invasion of Grenada*, p. 91.

<sup>71</sup> Kukielski, *The U.S. Invasion of Grenada*, p. 27.

<sup>72</sup> Cole, *Operation Urgent Fury Grenada*, pp. 67–68.

<sup>73</sup> エドワード・N・ルトワック『ペンタゴン——知られざる巨大機構の実態』江畑謙介訳 (光文社、1985 年) 71–74 頁。

兵力を推察したものの、その展開場所に関する正確な情報はなく、アメリカ軍の上陸場所の選定にはリスクが伴った<sup>74</sup>。

情報共有の面では、作戦途上で戦況によって陸軍と海兵隊の作戦地境が変更される事例も複数回発生した（巻末地図参照<sup>75</sup>）。しかし、この情報は現地の第 82 空挺師団の全部隊には届かなかった。相互に連絡幹部が在駐しておらず、通信に必要な相互のコールサインも不明であったためである。そのため海兵隊と陸軍部隊は、相互に接近していることを知らないままであり<sup>76</sup>、これは友軍相撃を招きかねない状況だった。

また、情報収集にも大きな失策があった。アメリカ人学生の救出がそもそもの作戦目的だったが、学生が所在するキャンパスが 2 か所あるという事実が判明したのは作戦開始後であった。学生の所在地は秘匿されていたわけではなく、事前に電話連絡すれば明らかになるものだった<sup>77</sup>。作戦終了後のアメリカ陸軍における研究の中でも、計画および作戦実施中における情報に関する支援とその伝達は遅く、不正確かつ不完全で調整も取られていなかったと結論づけられており、海軍の研究でもこの問題について同様の結論が導き出されている<sup>78</sup>。

### （3）通信等の相互運用性の不備

陸軍の地上部隊と海・空軍の航空機の間で通信の相互運用性が欠如し、作戦に支障が発生したことも大きな問題だった。たとえば、10 月 27 日に陸軍空挺部隊が海軍の航空機支援等を依頼した際には、フォート・ブラグに所在する部隊に火力支援を申請し、そこから衛星通信で海軍艦艇に伝達しなければならなかった<sup>79</sup>。このような方法では通信系統に結節があり、即時性に問題があった。また既述したように、初日にも海兵隊やシールズが空軍機による支援を求めた際、グレナダ軍の抵抗が弱かったために大問題とはならなかったとはいえ、直接の無線通信ができないために迅速な支援が得られなかった。相互運用が可能な通信能力が不足した原因は、作戦計画を策定する時間の短さと、過度な秘密保全にあった。統合軍事作戦が急遽決定したため、同じ通信電子規定（Communications Electronic Operating Instruction: CEOI）、暗号、通信秘密保全手順を、全ての兵士に提供する時間はなかった。また、相互運用性のある通信機器も部隊に提供できなかった。海軍の無線機と陸軍の無線機は直接通信が不可能であり、陸軍から海軍への火力支援は視認距離にあっても

<sup>74</sup> Cole, *Operation Urgent Fury Grenada*, p. 15; Kukielski, *The U.S. Invasion of Grenada*, p. 22.

<sup>75</sup> Cole, *Operation Urgent Fury Grenada*, p. 84; Spector, *U.S. Marines in Grenada 1983*, p. 4. いずれの文献でも、3 日目（D+2）で作戦地境が変更されたように地図上は記載してある。しかし実際には、1 日目の夜に海兵隊がグランド・マル湾に上陸した時点で、作戦地境は実質的に変更されている。なぜ地図上の記載が整合されていないのかは不明である。

<sup>76</sup> Spector, *U.S. Marines in Grenada 1983*, p. 21.

<sup>77</sup> シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』266 頁。作戦初日にポイントサリナス飛行場近くのトゥルー・ブルーの学生寮に突入したレンジャー部隊は、学生たちから直接、大半の学生は別の場所（グランド・アンス）にいることを聞かされ、初歩的な情報の不備に気づくこととなった。

<sup>78</sup> David C. Isby, *Leave No Man Behind* (London: Orion Publishing Group Ltd, 2004), pp. 203–204.

<sup>79</sup> Cole, *Operation Urgent Fury Grenada*, p. 52.

即時的に実施できなかつた<sup>80</sup>。

また、地上の陸軍レンジャー部隊が掩護する海兵隊の「シーコブラ」に、正確な攻撃目標を伝えることが当初できなかつた事例は、通信の不備ではなく、相互が保有する地図が異なっていたという初歩的な事項が原因だった<sup>81</sup>。これらの問題は、各軍種間の調整時間等が不足していることに起因していた。10月27日には陸軍空挺部隊が敵狙撃兵への対処のために、近辺の海軍の連絡中隊を通して海軍機による空爆支援を要請したが、目標位置の特定が不十分であったため、「コルセア」によって友軍への誤射が生じ、負傷者が発生した。これも、正確な目標標定に不可欠な CEOI を、連絡中隊が持っていなかつたのが要因だった<sup>82</sup>。

#### (4) 指揮統制の問題

指揮統制に関しても、計画時から様々な問題を抱えていた。海兵隊を上陸させる海軍の大佐が、一時的に地上戦を指揮する陸軍少将の指揮下に入ることや、海兵隊と陸軍レンジャーの混成で上陸を実施することにしたからである<sup>83</sup>。

また空軍では、MAC のロバート・パターソン (Robert B. Patterson) 准将が空輸を担当した一方で、TF126 司令官でリチャード・メイヤー (Richard L. Meyer) 准将がキューバからの介入を阻止するため、早期警戒管制機や戦闘機を指揮していた。しかし、同じ空軍の准将でグレナダの作戦に参加しているにもかかわらず、パターソン准将は作戦3日目までメイヤー准将の関与を知らなかつた。さらにパターソン准将は、各軍種の指揮官たちがどのような関係にあるのか、書類で示されることもなかつたと述懐している<sup>84</sup>。本章で掲載した指揮統制図でも注記したように、各種文献で組織図が異なっているという点は、計画から作戦実施までの期間が短かつたという事情があつたにせよ、指揮統制系統に関して非常にあいまいな部分が存在していたことを示している。

計画段階での部隊の任務変更や分割も、状況をさらに複雑化させた。たとえばレンジャー部隊の目標は当初2か所だったが1か所に変更され、一部は首都でのデルタフォース援護のために切り離されるなど、複雑な指揮が必要となつた<sup>85</sup>。さらに作戦1日目の当初、TF123 のレンジャー2個大隊を同日遅くに TF121 の指揮下に転移するか否か、双方の指揮官で意見が食い違つた。結局、メットカーフ中將の判断によって、レンジャー部隊は当日中に TF121 へ移管されることとなつたが<sup>86</sup>、混乱は否めなかつた。

<sup>80</sup> Ibid., p. 67. これらの迅速な航空支援の問題は、通信が可能な空軍のガンシップや陸軍のヘリコプターが近辺に配備されることにより、多少は解消された。

<sup>81</sup> Spector, *U.S. Marines in Grenada 1983*, p. 10.

<sup>82</sup> Cole, *Operation Urgent Fury Grenada*, p. 54.

<sup>83</sup> Ibid., pp. 30–31. 既述したように、混成計画は JCS の助言で修正された。

<sup>84</sup> Kukielski, *The U.S. Invasion of Grenada*, p. 33.

<sup>85</sup> Ibid., p. 47.

<sup>86</sup> Raines, *The Rucksack War*, pp. 267–268.

### (5) 不十分な事前検討、準備による様々な問題の発生

作戦開始に先立つシールズの南部海域での偵察が失敗した主因は、時間設定の基本的な稚拙さであった。関係部署は降下時間を遅延させる際に現地時間を使用したか、アメリカ東部時間のサマータイムとのずれを考慮せず計画した結果、日没前の薄暮に降下着水する予定が、実際には1時間ずれた日没後の降下となったのである。作戦運用で使用される時間は通常グリニッジ標準時だが、この基本的原則が守られなかった<sup>87</sup>。また、作戦劈頭のシールズの失敗は、時刻の誤りだけでなかった。海・空軍は暗闇と悪天候下での降下訓練を事前に実施しておらず、降下後に使用する舟艇の堅牢性の問題も作戦実施時に判明する有様だった<sup>88</sup>。

さらに、JTF120は即席の統合部隊であり、作戦実行までの時間の少なさは様々な場面で齟齬を生んだ。たとえば、レンジャー部隊がアメリカ本土から空軍の輸送機で出発する前に、攻撃時間が2時間半ほど延期された。当然ながら、資材の積み込みや人員の乗り込みの時間にも余裕が生じたレンジャー側は解釈したが、空軍側は当初の時間通りの出発を考えており、現場では搭載準備の短縮化も含めて大混乱となった<sup>89</sup>。

有事の作戦にもかかわらず、平時における各軍種間の様々な手続きの問題等が表面化したのも特徴的であった。陸軍のヘリコプターが給油のためメットカーフ中將の座乗していた強襲揚陸艦「グアム」に着艦した際、ワシントンの海軍監理部は平時の業務処理を根拠として、予算上の手続きの欠如から給油不可の指示を出したが、実際のところメットカーフ中將はこの指示を無視した。また、ポイントサリナス飛行場に所在する陸軍部隊を海兵隊のヘリコプターで輸送し、グランド・アンスのアメリカ人学生を救出する任務を考えたシュワルツコフ少將に対して、その指示を受けた海兵隊大佐は当初、別軍種であるとして陸軍を海兵隊のヘリコプターに乗せることを拒絶した。シュワルツコフ少將はその海兵隊大佐に対して、命令不服従で軍法会議にかけることを仄めかし、何とか彼を服従させたのであった<sup>90</sup>。

時間不足によって、各軍種が参加する十分な調整の機会も失わせた。そのため、シュワルツコフ少將のみならずメットカーフ中將やトロボー少將も、指揮官会議の中で情報、兵站、司令部機能等の不十分さを感じていた。特にポイントサリナス飛行場へのシールズの偵察が失敗に終わったことで、シュワルツ少將は若干の作戦延期を訴え、マクドナルド大將を除き他指揮官も同感だったが、軍事の専門家でない国務省の担当者の一言で却下されてしまった<sup>91</sup>。

<sup>87</sup> John T. Carney Jr. and Benjamin F. Schemmer, *No Room for Error* (New York: Ballantine Publishing Group, 2002), pp. 130–131.

<sup>88</sup> Kukielski, *The U.S. Invasion of Grenada*, p. 30.

<sup>89</sup> *Ibid.*, pp. 47–48.

<sup>90</sup> シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』265、269–270頁。

<sup>91</sup> Kukielski, *The U.S. Invasion of Grenada*, pp. 32–33. 国務省の担当者は作戦延期の意見に対し「世界最強の軍事大国が世界最弱の軍事小国を相手にするのに、作戦を24時間遅らせるのか」と述べた。

## 5. 作戦の評価および爾後のアメリカ軍への影響と変革

### (1) 作戦の評価

レーガン大統領はこの作戦について、グレナダがテロを輸出し、民主主義を弱体化させるための軍事拠点となることを防止するべく、ギリギリのタイミングで実施されたものと述べた。作戦後にアメリカ軍が捕獲した兵器や文書は、グレナダが共産主義国家との秘密協定によって武器を入手していたことを示した。そして、1985年には人口の約10%が軍服を着る軍事国家になることを示唆していた。一方で、グレナダ自体が人口を含めて小国であり、グレナダが自衛を超えた軍備を保有する危険性について、CIAの報告書では認識していなかった<sup>92</sup>。

1984年の初頭、下院の軍事委員会は「エージェント・フューリー」作戦を評価するために、非公開の公聴会を実施した。マクドナルド大將は完全な作戦の成功を簡潔に述べたものの、それが物足りないものであったため、さらに機密扱いの幹部会議が招集され、問題点や教訓事項が議題となったが、詳細は公開されていない<sup>93</sup>。イラン人質救出作戦と異なり、実際には様々な問題があったものの、「エージェント・フューリー」作戦は成功を収めた上に、損害もそれほど多くなかったため、メディアがこれを執拗に追及することはなかった。

ただし、1984年春に上院議員の側近からリンド・レポートなる評価報告が提出され<sup>94</sup>、若干の議論を巻き起こした。同報告の中では、特にグレナダで使用されたヘリコプターの損失率の高さが問題視された<sup>95</sup>。この批判に対して JCS は、損耗率の高さは民間人の犠牲者を減らすために策定された交戦規定が原因であると回答した<sup>96</sup>。なお、1990年にアメリカ議会調査局 (Congressional Research Service) は、アメリカが関連した 20 世紀の低強度紛争を対象とした研究も実施した。その中で、グレナダの作戦は救出作戦ではなく、懲罰的遠征 (Punitive Expeditions) と定義されている<sup>97</sup>。

### (2) アメリカ軍の変革への影響

#### i. 陸軍への影響

本作戦によってレンジャー大隊の有効性が認められたため、1984年に陸軍省は、予備役だった1個レンジャー大隊とレンジャー連隊本部を、現役に編入すると発表した。その結

---

<sup>92</sup> Ibid., p. 191.

<sup>93</sup> Ibid., p. 201.

<sup>94</sup> 作成者はリンド (William S. Lind) であった。

<sup>95</sup> 作戦初日からの3日間で、使用されたヘリコプター総数107機のうち9機が失われた (損失率9%)。これは、対空ミサイル等有効な対空兵器を保有しない敵に対して高い損失率と捉えられた。

<sup>96</sup> Kukielski, *The U.S. Invasion of Grenada*, pp. 201–202.

<sup>97</sup> John M. Collins, Frederick Hamerman, and James P. Seevers, *U.S. Low-Intensity Conflicts 1899–1990* (Washington: U.S. Government Printing Office, 1990), pp. 53, 55–56.

果、現役のレンジャー部隊の規模は、その40年間の歴史の中で最大規模となった<sup>98</sup>。また、各種特殊部隊の活躍は、1980年のイラン人質救出作戦の失敗によって動き始めたアメリカの特殊作戦部隊の活性化を加速させた。そして1987年には、アメリカ特殊作戦軍（United States Special Operations Command: USSOCOM）が発足し、陸海空軍の特殊部隊が単一の組織に属することとなった<sup>99</sup>。

一方、政府や軍上層部の議論とは別に、作戦に参加した通常部隊のほとんどは現場から事後報告書を作成し、上申していた。陸軍参謀総長ジョン・ウィッカム（John A. Wickham Jr.）大將は、通常の戦後処理だけでは物足りなく感じ、カンザス州フォート・レブンワース（Fort Leavenworth）に特別研究チームを編成し、グレナダでの作戦の徹底的な検証を実施することとした。この特別な取り組みが、陸軍戦訓学習センター（Center for Army Lessons Learned: CALL）の常設化につながっていく<sup>100</sup>。

1982年のFM100-5で導入されたドクトリン「エアランド・バトル」は、欧州での大規模な対ワルシャワ条約機構軍との戦闘を前提としたものだった。一方で「アーjent・フューリー」作戦は、低強度紛争に近い戦術レベルの作戦だった<sup>101</sup>。陸軍が低強度紛争を無視したわけではなかったとはいえ、陸軍のドクトリン開発における優先順位は明らかに低かった。1986年のFM100-5でも「エアランド・バトル」は主として中・強強度紛争を念頭に置いていたが、低強度紛争でも適用できるとした<sup>102</sup>。後述するように、グレナダの軍事作戦が、ゴールドウォーター・ニコルズ法制定に弾みをつける一因となった側面はあるかもしれない。しかし他方で、陸軍のドクトリンへの影響はほとんどなかった。陸軍省はグレナダでの作戦を契機として、後方支援部隊の編成を、機能別大隊から各種機能中隊を混合した大隊へと再構成するといった改革を、1984年に実施することになる<sup>103</sup>。

## ii. 空軍への影響

航空作戦の面では、相手に空軍も防空網も存在しなかったため、「アーjent・フューリー」作戦は印象の薄いものだった。空軍は近接航空支援を実施したが、制空戦闘機、給油機、偵察機等は間接的な役割しか果たさなかった。しかし、今後の大規模航空作戦のあり方については、大いに示唆を与えるものがあつた。グレナダでの作戦は、航空部隊と地上部隊の連絡方法に重大な欠陥があることを示した。JCSの報告書が指摘するように、「相互運用可能な通信の欠如は、指揮統制のシステムの欠如を悪化させた」のである。これら

<sup>98</sup> カウソン『世界の特殊部隊作戦史 1970-2011』113頁。

<sup>99</sup> Daniel P. Bolger, “Special Operations and the Grenada Campaign,” *The US Army War College Quarterly: Parameters*, volume 18, number 1 (1988), p. 60.

<sup>100</sup> Kukielski, *The U.S. Invasion of Grenada*, p. 202.

<sup>101</sup> 北川敬三『軍事組織の知的イノベーション——ドクトリンと作戦術の創造力』（勁草書房、2020年）122-123、152頁。FMはField Manualの略で、陸軍の野外教範である。

<sup>102</sup> Richard Lock-Pullan, *US Intervention Policy and Army Innovation: From Vietnam to Iraq* (New York: Routledge, 2006), p. 104.

<sup>103</sup> Raines, *The Rucksack War*, p. 522.

の問題はその後のレッドフラッグ演習でも表面化し<sup>104</sup>、1980 年代後半に実施された他の大規模な軍種間演習でも顕在化した<sup>105</sup>。

その一方で、ガンシップ AC-130 および ME-130 等の特殊作戦機は活躍した。その結果、ME-130 の乗員は同年で最も賞賛に値する飛行とされ、AC-130 の乗員は最も優れた空輸機の乗員に贈られる賞を空軍から授与された<sup>106</sup>。このように特殊作戦機の有効性は目立ったものの、本作戦によって特殊作戦機が大幅に増強される契機になった証拠は見られない。

### iii. 海兵隊への影響

グレナダにおける海兵隊の作戦は一応成功したが、水陸両用作戦を実施する上では、過大な経費と調整に問題があった。さらに、ほぼ同時期に、バイルートでの平和維持活動に従事していた海兵隊が、自爆テロにより多くの死傷者を出したのは衝撃的だった。これらの事態が、自己のドクトリンに問題があると海兵隊に認識させるに至った。海兵隊総司令官としてアルフレッド・グレイ (Alfred M. Gray Jr.) 大将が 1987 年に着任すると、この時代に求められる任務を反映して、海兵水陸両用戦隊 (Marine amphibious unit: MAU) を海兵遠征隊 (MEU) に改めた<sup>107</sup>。1980 年のイラン人質事件以降、グレナダの作戦の経緯から、1983 年には低強度紛争における海兵隊の信頼性の向上に関する研究が実施された。他軍種と異なり、海兵隊に特殊部隊を独立して創設する機運はなく、通常部隊に特殊訓練を行った。このようにして、海兵隊は固有の任務を超えた特殊作戦対応能力 (Special Operations Capability: SOC) を持つようになった<sup>108</sup>。

海兵隊のドクトリンに関連する機動戦 (Maneuver Warfare) の概念が実戦で試されたのは、「アージェント・フューリー」作戦が最初とも言われている。作戦に参加した第 22 海兵遠征隊指揮官だったレイ・スミス (Ray Smith) 中佐は、グレナダでの成功の秘訣はスピードが鍵であったと述べている。機動戦のドクトリンを作った海兵隊総司令官グレイ大将も、グレナダでの海兵隊の能力を賞賛している。敵は海兵隊が常に予想外の場所に現れたことを強く感じていた、これが機動戦の心理的影響を表している、というのである。陸軍の空挺部隊が 2 個旅団を並べて正面攻撃するのに 2 日間を要したのに対し、海兵隊は同様の戦場 (島南部) に即日でも到着して戦闘態勢にあった。機動戦について早くから注目していたウィリアム・リンド (William S. Lind) も、機動戦の正当性がグレナダで証明されたと主張している<sup>109</sup>。リンドは、ジョン・ボイド (John Boyd) による OODA (observe, orient,

<sup>104</sup> 1975 年から実施されている航空戦軍事演習で、アメリカ以外に同盟国の空軍も参加している。

<sup>105</sup> Brian D. Laslie, *The Air Force Way of War* (Lexington: The University Press of Kentucky), p. 103; Cole, *Operation Urgent Fury Grenada*, p. 67.

<sup>106</sup> カウソーン『世界の特殊部隊作戦史 1970–2011』114 頁。

<sup>107</sup> トム・克蘭シー『トム・克蘭シーの海兵隊』橋本金平訳 (東洋書林、2006 年) 94–95 頁。

<sup>108</sup> 同上、96 頁；レイ・ボンズ『アメリカ特殊部隊』福井祐輔訳 (東洋書林、2002 年) 197–198 頁。

<sup>109</sup> Stephen Robinson, *The Blind Strategist: John Boyd and the American Art of War* (Dunedin: Exisle Publishing Pty Ltd, 2021), pp. 242–243.

decide, act) ループの迅速化という概念から機動戦を理解していった<sup>110</sup>。

海兵隊はリンドの考えを受け入れ、彼の著書『機動戦ハンドブック』には、海兵隊戦術部長マイケル・ワイリー (Michael D. Wyly) 大佐が水陸両用戦学校で実施した、機動戦に関する講義が付録として入れられている<sup>111</sup>。このように「アーjent・フューリー」作戦は、海兵隊において機動戦の正当性に弾みをつけることに寄与した。しかし実際のところ、スミス中佐も認めているように、当初の海兵隊の戦場だった北部では大した敵に遭遇しておらず、機動戦の真価が問われるのは湾岸戦争を待たなければならなかった<sup>112</sup>。

#### iv. ゴールドウォーター・ニコルズ法への影響

「アーjent・フューリー」作戦の結果は、有効な統合軍への道を開いたとされる、1986年のゴールドウォーター・ニコルズ法の制定に影響を与えたのだろうか。この法律が制定されたきっかけとして、イラン人質救出作戦や本作戦における各軍種間の協力の失敗が指摘されることが多い<sup>113</sup>。しかし、これらの実戦が、軍内部から統合機運を盛り上げることに強くつながったかは疑問である。法律の策定による統合の強化は現場レベルからのボトムアップではなく、法律の名前でわかるように、議員らの「上からの改革」と言えるものだった<sup>114</sup>。

イラン人質救出作戦の失敗後、ビル・ニコルズ (Bill Nichols) 上院議員が国防組織を再編成する議論を主導した。1982年当時、JCS議長であったデイビッド・ジョーンズ (David Jones) 空軍大将や陸軍参謀総長エドワード・メイヤー (Edward Meyer) 大将は再編成に賛成であったが、この2人が退官した同年以降は、1986年にゴールドウォーター・ニコルズ法が制定されるまで、統合に関わる国防組織の再編成に関する複数回の法案について、各軍種とも反対した。グレナダでの作戦では軍種間の問題が多発したが、各軍種のトップがこれを統合作戦への課題として問題視したわけではなかった。さらに、大統領や国防長官も国防組織の再編には不同意であった。

最終的に法律制定の強い追い風となったのは、再編に反対していた上院、軍の高官たちが1985年に入れ替わったことだった。グレナダでの作戦の結果を統合の問題と述べた議員も存在したが<sup>115</sup>、少なくとも作戦直後は、統合に関する法律制定への大きな推進力を与えるには至らなかったと考えるのが妥当と思われる。

<sup>110</sup> Lock-Pullan, *US Intervention Policy and Army Innovation*, pp. 81–82.

<sup>111</sup> *Ibid.*, p. 85.

<sup>112</sup> Robinson, *The Blind Strategist*, pp. 245–246.

<sup>113</sup> たとえば、大田文雄「ゴールドウォーター・ニコルズを越えて——自衛隊統合の将来に向けてのさらなるステップ」『国際安全保障』第34巻第4号(2007年3月)73頁。

<sup>114</sup> 北川『軍事組織の知的イノベーション』133–134頁。

<sup>115</sup> 部谷直亮「ゴールドウォーター・ニコルズ法の制定過程——政軍関係の視点を中心に」『国際情勢』第80巻(2010年2月)242、245–248、257–258頁。

## おわりに

「アージェント・フューリー」作戦は、政治的には成功した。アメリカ人学生が救出され、帰国時に感謝を示す姿はレーガン大統領にとって追い風となった。そして、第3世界における共産主義の浸透を防ぐために、武力を行使する用意があるというアメリカの意思を世界に示した。一方、軍事作戦という観点からすると、大惨事に至らなかったのは、ひとえに敵戦力の弱さによるところが大きい<sup>116</sup>。とはいえ、ベトナム戦争を経て海外における軍事行動に消極的となっていたアメリカが、その姿勢を改める転換点にはなったと言えるだろう。

副指揮官であったシュワルツコフ少将は、作戦で必要以上の人命を犠牲にしたと述べている。シュワルツコフは作戦で浮き彫りとなった問題として、正確な情報の欠如、通信連絡網の欠陥、陸・海・海兵隊3軍間の激しい確執、戦場で決定すべき事項に関して上級司令部が口出しすること、マスコミとの不和等を挙げている。これらの問題はすぐに是正されたわけではなかったが、改善すべき点が戦闘報告の中で明確に示されたことは、ベトナム戦争時と比べれば評価に値すると彼は捉えた<sup>117</sup>。

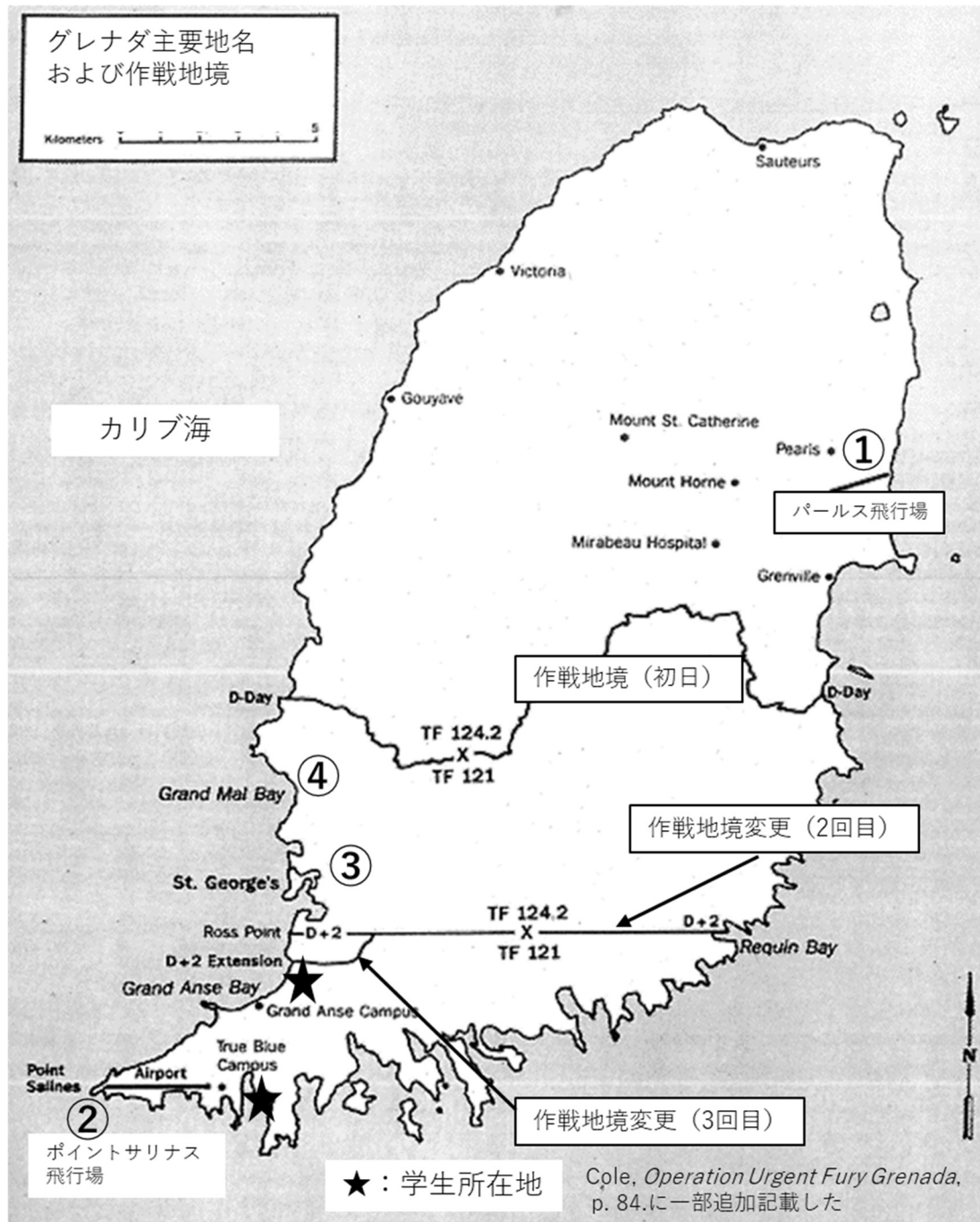
「アージェント・フューリー」作戦は、陸軍および海兵隊には一定の影響を及ぼしたものの、主として地上戦であったこともあり、空軍および海軍にはさほど影響を与えなかったと推定される。また、ゴールドウォーター・ニコルズ法制定への影響も、従来言われているほど大きなものではなかったと考えられる。興味深いのは、ゴールドウォーター・ニコルズ法の制定は、一貫して文民から強く働きかけられたということである。グレナダにおける作戦を通じて、統合軍としての問題点がいくつも浮かび上がったにもかかわらず、作戦実施の直後に各軍種のトップが統合の推進に向けて積極的に動くことはなかった。各軍種は、自ら率先してセクショナリズムを乗り越えることができなかったのである。このことは、統合という各軍種の独立性に関わる改革に踏み込む上では、第三者的な外部の軍事専門家による、常続的な検討と勧告が必要であることを示唆している。

---

<sup>116</sup> Isby, *Leave No Man Behind*, pp. 202–203.

<sup>117</sup> シュワーツコフ『シュワーツコフ回想録』273–274頁。

別図



- ① : 1日目 (10月25日)、海兵隊部隊が北部パールス飛行場等を攻撃
- ② : 1日目、レンジャー部隊によりポイントサリナスを攻撃、後に陸軍空挺部隊を増強
- ③ : 1日目、首都近辺の目標を陸海特殊部隊が攻撃するも不十分
- ④ : 1日目夜、海兵隊がグランド・マル湾に上陸、翌日首都へ進撃

